Fujino Waldorf School

シュタイナー学園通信　2025 Spring

点数で
はかれない
ものこそが
深く大きい

特集

藤野移転20周年

座談会
あの頃、わたしたちは

インタビュー
移住者の移り変わり 池辺潤一さん

FUJINO STEINER COLUMN
19期卒業生 西田歩夢さん

特集

学校法人 シュタイナー学園

藤野移転20周年

旧藤野町の名倉小学校廃校舎をお借りして
学校法人化してから20年が過ぎました。
自然豊かな山里に移転して
子どもたちはのびのび育ち
学園とともに、この地に根ざしてきました。
決して平らな道のりではありませんでしたが
あたたかく迎え入れてくださった地元の方に
感謝の気持ちを込めて
改めてこの20年を振り返ります。

1987

「東京シュタイナーシューレ」として1年8名のクラスをスタート

2001

NPO法人になり9年制に

2005

藤野移転

旧津久井郡藤野町（現・神奈川県相模原市緑区）の名倉小学校廃校舎を借り、特区を活用して学校法人化を実現。初・中等部の認可を受け、自然豊かな山里で歩みを新たにしました。

2009

新校舎完成

少しずつ地域に根付いていく中で、校舎南側の土地に新校舎を建築。オイリュトミー室と2教室からなるこの校舎は、形・色・材質などにシュタイナー教育の理念を体現する工夫を凝らしました。

2012

高等部設置

初・中等部が学校法人となった後も、高等部はNPO法人という状況が続きました。いくつもの経緯と多大な努力の末、旧吉野小学校廃校舎を借りて高等部を設置しました。初・中・高12年一貫教育の認可された学校というこの大きな希望が実現したのは、東京シュタイナーシューレから数えて25年目のことでした。

現在～2025

東京シュタイナーシューレのスタートから38年目を迎えた現在、初等部から高等部まで約250名の児童・生徒が藤野の地で学んでいます。どんな時代でも、子どもたちが「生きる力」を持った人に育ってほしいと願い、100年続く学校を目指しています。

座談会

あの頃、わたしたちは

学校法人化に伴い
三鷹から藤野へ移転。
地元の方々や親たちの
協力なくしては
実現しませんでした。
その激動の時代に
関わった方々に
お話を聞きました。

藤野地域在住
中村賢一さん
元保護者
中村節子さん
教員／元保護者
浦上裕子さん

インタビュアー／三谷ゆかり（事務局広報）
ライター／林 亜沙美

役場にかかってきた電話。それがはじまりだった

――2004年11月に東京都・三鷹市で運営されていた「NPO法人東京シュタイナーシューレ」が学校法人として認可され、「学校法人シュタイナー学園」が誕生。翌2005年に神奈川県・旧津久井郡藤野町の名倉小学校廃校舎を借り受け移転し、今年で20年が経ちます。当時、旧藤野町役場に勤めていた中村賢一さんは、移転に尽力してくださったひとり。誘致のために動いてくださったポイントは何だったのでしょうか？

中村賢一さん（以下、中村（賢））：必然的にそうなった、そんな感じがしています。1998年前後から、旧藤野町では小学校の統廃合が進んでいました。出生数が減り、人口はどんどん減少。10校あった学校を3校に減らすことになり、廃校となる7校の跡地利用が町の大きな課題でした。今でもよく覚えているのだけど、2003年に突然「東京シュタイナーシューレの古賀と申しますが…」と、跡地利用について、シュタイナー学校の先生から役場に電話がかかってきた。翌日すぐに藤野に見学にいらしたので、学校を案内したんだけど、帰り際に古賀さんが「ここに来ます」とおっしゃったんです。「だいぶ気に入ったんだな」と思いました。これがすべてのはじまりでしたね。

浦上裕子さん（以下、浦上）：当時、古賀先生が藤野町のことを元シューレの音楽教師をされていた竹田喜代子先生に教えていただき、それがきっかけでした。ところで賢一さん、東京シュタイナーシューレと突然言われて、「何だろう…？」とよくあやしく思わなかったですね（笑）。

中村節子さん（以下、中村（節））：その後、三鷹まで学校見学に来てくださいましたよね？よく覚えています。

中村（賢）：まずは見なきゃと思って妻と車で行きました。教室の中で、子どもたちが〝茶摘み〟の手遊びをしたり絵を描いていたことが印象に残っているな。元々藤野は、戦時中に多くの芸術家が疎開して来た町。1986年頃には芸術を通した町づくりを目指した「藤野ふるさと芸術村構想」がはじまっていて、学校を見学して、その構想にもぴったりだと思ったんだよ。

――浦上先生と節子さんは、当時シューレに子どもを通わせている保護者でした。そもそも、なぜ移転の話が出たのでしょうか？

浦上：2002年頃、三鷹校舎にはすでに100名以上の子どもが在籍していました。けれど校舎として借りていた木造の建物は老朽化が進み、耐震性への不安もありましたし、教室が足りなくなっていました。安全面のこと、これからの学校のことを考えて、新しい校舎を探す案、三鷹に校舎を建てる案、さまざまな案が出ましたが、先生方の〝12年間通える学校にしたい〟という熱い想いがあって、移転しようという流れになっていきました。

中村（節）：当時は〝移転プロジェクト〟と呼ばれていて、とても大変でした。引っ越せる人もいれば、それができない家庭もある。みんなが同じ方向を向くことは難しく、意見が分かれました。私は学校の近くに住んでいたし、三鷹校舎も好きだったので、残したい派。当時は浦上さんとは学校のことに関してはバチバチに対立していた状態でしたね。

12年間通える学校を。その想いが支えとなった

中村（賢）：こちらも大変な状況だったよ。これから先の町のことを考えるとぜひ誘致したい。けれど、住民合意は大変だった。当たり前ですよね。〝学校〟は町の人にとってとても大切な場。それを知らない人に渡すんだから、葛藤があって当然。だから時間をかけて丁寧に進めたよ。学校統廃合を進めた時期は親戚や友人からも縁を切ると言われてしまうこともあったし、平坦な道ではなかったな。あと、誘致に関して忘れてはならないのが、当時の内閣府の「構造改革特別区域法」。これがあったからまとまったようなもの。藤野は「教育芸術」特区で、名倉廃校舎を借りるためには学校法人化を果たさなきゃいけない。浦上さんは議員にかけあったり、走り回っていたよね。

浦上：そうですね。子どもを抱えた主婦が、議員さんたちの前で演説していました（笑）。でもそれも賢一さんの後押し、人と人をつないでくださる力があったからこそできたことです。

――大変な中でも前進しようと思えた原動力は何なのでしょうか？

中村（賢）：つらかったけど、そのことについてのネガティブな感情はなかったかな。実際に人口がどんどん減っていってる。考え方はたくさんあるけど、未来を見据えて、やることをやろうという気持ちが大きかったね。

中村（節）：子どもにとっては分からないけれど、私にとってはシュタイナー教育に対する確信みたいなものはありました。

浦上：12年間通える学校を、という想いですね。それだと三鷹校舎では難しかったので。

――移転後、変化したことを教えてください。

中村（賢）：移住者が増え、子どもが増え、空き家が少なくなり、新しい家も増えた。バスも運行されている。終末医療をおこなってくださるお医者様も来て、町が豊かになったかな。何より、多様な価値観が増えたことは嬉しいよね。

浦上：移転後は高等部設置のために動きました。吉野小学校の廃校舎を借りられることになり、2012年に神奈川県知事により高等部が正式に認定されました。NPO時代の高校生たちには苦労をかけましたが、ようやく公的にも12年制の夢が叶いました。

受け入れる基本姿勢が豊かな未来をつくる

――20年経った今、未来の学園に対するメッセージをお願いします。

浦上：もう20年も経ったんですよね。12年制の学校、保育園に学童も運営しているので、それらをさらに充実させていくことがこれからの目標です。教員を養成し、増やしていく。ほかにも福祉施設や支援教育、農場などさまざまな話が生まれていますが、これらは学校法人の枠組みにこだわらず、やりたいと感じている方たちが自らの力を発揮して実現していって欲しい、そう願っています。

中村（節）：まず、20年もこの場所で受け入れてもらえたことがすごいです。藤野の方々の懐の深さに感謝しかありませんね。そしてこれだけ経つと、移転時の分断や痛みも、「必要があって起きたことだったんだ」と思えるようになってきます。未来もなるようになっていくのでしょうね。時代が持つ課題があると思うので、それに合わせて学園も変化していくのかな、と。

中村（賢）：20年と言わず、これから先も100年は続いていって欲しいよね。学園のおかげで、多様性や新たな文化が藤野に育まれてきたと思う。それを感じて地元の人も「負けてられない」と、明治時代から続いていた藤野地区の村歌舞伎を復活させ、〝復活村歌舞伎〟として再演されるようになった。これはポジティブな進化だよね。きっとほかにも、こういう現象が多々起きているんじゃないかなと思う。自然な変化がそこにある。拒否するよりも受け入れていく基本姿勢がある方が、結果、良いものになると実感しているんだ。個性を受け入れる町、藤野。シュタイナー学園もそうあって欲しい、その輪が広がっていくといいなと思っています。

（写真右より）

中村 賢一 Kenichi Nakamura
2004年まで旧藤野町役場に勤める。藤野ふるさと芸術村メッセージ事業、パーマカルチャーセンター・ジャパン、学園の誘致など町の発展に貢献。

浦上 裕子 Yuko Urakami
シュタイナー学園12年アドバイザー、高等部校長。3人の子どもが学園を卒業。藤野への移転、学校法人化、高等部設立に尽力。

中村 節子 Setsuko Nakamura
4人の子どもがそれぞれシューレ、学園に通い、広報、カレンダー、手づくり係などを担当して学園を支えた。

そして、100年続く学校へ

未来の先生を育てる
教員養成講座・インターンシップ制度

教員養成講座担当・2025年度8年担任
帖佐 美緒 先生

先生を目指す方のため、学園には「シュタイナー学校教員養成講座」と「インターンシップ制度」があります。シュタイナー学校の授業にはいわゆる「マニュアル」がないので、先生になるハードルが高く感じるかもしれません。でも、授業の準備はとても楽しく幸せな時間。その学年で扱う内容をどう伝えようか、子どもたちの顔を思い浮かべていると、授業のアイデアが湧いてくるのです。いざやってみると思いもよらない反応が返ってくることもありますが、それが自分の視野を広げてくれ、エネルギーになります。失敗したってそれも学び！と思って子どもたちと楽しむ。先生はそれが面白い。体験すると人生が変わります！

自分が羽ばたく空を目指して
卒業生たち

2024年度
12年アドバイザー
増渕 智 先生

大切にしたいのは、一人ひとりが自分の学びたいことを、時間をかけて見つけ深めていくことです。近年は大学の入学試験も多様化し、総合型選抜試験等に挑み、進学して学びを深める生徒も増えました。卒業プロジェクトで取り組んだテーマを発表し、面接官との会話を楽しんだ、と言う生徒もいました。緊張し過ぎず人前で話せるのは、学期祭や劇、クラス発表などで人前に立つ機会が多かったからかもしれません。卒業生がそれぞれ歩む道で、学園での学びが助けになることを願っています。

学園を支える
あたたかい支援
寄付

学校法人
シュタイナー学園
理事長
伊藤 彰洋

少子化が進む中でも多様な教育へのニーズは高まり続けています。私たちは、シュタイナー教育の理念に基づき、自然豊かな藤野の地を活かし、この学園でしか学べないこと、教えられないことの喜びを探求し、多くの方に知っていただきたいと思っています。名倉校舎は築44年、吉野校舎は築47年と老朽化が進み、修繕費だけで年間1千万円が見込まれます。あたたかい寄付をお寄せくださる皆さま、協力してくださる地元の皆さまに感謝するとともに、より多くの方に応援していただける学園であるよう、努力していきたいと思います。

▲シュタイナー学園HP「ご寄付のお願い」

移住者の移り変わり

都内から藤野へ移住し、
お子さんがシュタイナー学園で
12年間を過ごした池辺潤一さん。
建築家として藤野で
たくさんの家づくりに
携わってきた池辺さんに、
移住者の移り変わりをうかがいました。

持続可能な生き方を
したいという思いから
自然豊かな藤野へ

――池辺さんはどのような経緯で都内から藤野へ？

子どもが生まれてから環境問題を意識するようになりました。今のままでこの子が大きくなるまで守ってあげられるのか？と思い、より自然が身近な土地への移住を検討しはじめ、いろいろな地域を検討しましたが、温泉に入りにたびたび藤野に来ているうち、地元の方に「来ちゃいなさいよ」と言われて（笑）。ここなのかも…と移住を決めました。

――シュタイナー学園のための移住ではなかった？

土地を探していた時はまだ名倉小学校がありました。子どもが通うのはそこだと思っていたら、引っ越した頃に名倉小がシュタイナー学園になっていた（笑）。でも見学したら自分たちの思い描く暮らし方に合うと感じて、移転3年目の学園に娘が入学しました。

――移住当時と今とで変化はありますか？

もともと移住者に寛大な方が多い地区だったと思いますが、当時精力的だった地元の方たちも高齢になり、自治会運営など地域の役割が移住組の若い世代に降りて来るようになり、昔からの住人と移住者の境界がよりなくなってきたと思います。

仕事と地域活動が
暮らしの両輪に

――池辺さんは地域通貨「よろづ屋」の立ち上げメンバーですが、きっかけは？

持続可能な暮らし方をしたいと思い移住したけれど、ストーブ用の薪割りひとつとっても大変で、これはひとりじゃダメだと。そんな時「トランジションタウン」という持続可能なコミュニティづくりを目指す仲間と出会いました。ソーラークッカー作りやロケットストーブ作りなどいろいろな企画をするうちに、地域通貨もやってみようという話が出た。コミュニティをより楽しく、良くしていきたいね、と。

――モノや情報のやりとりなど、今では藤野の人をつなぐツールとして欠かせません。

以前はシュタイナー学園のために移住する人がほとんどでした。家の設計も子どものためのリクエストが多かった。この10年くらいで、人々のこう生きたい、こう暮らしたいという思いが変化したと思います。共働きが増えリモートワークもあって、特にお母さんの仕事スペースの希望が増えましたね。子どもが大きくなったら小さな商いをするスペースを作りたい、とか。より自分の人生を生きる女性や、社会に対して何かしたいと考えて藤野を選ぶ人が増えたと思います。

人のつながりが新たな
藤野の文化をつくる

――これから移住する人へのアドバイスを。

子どもが成長して自分たちの老後を考えはじめています。だから移住する方には老後も考えて、と（笑）。田舎はやろうと思えばやれることがたくさんある。土いじりとか仲間との趣味の活動とか、そういうことが活力になりますね。

――確かに藤野はやろうと思えば何でもできます。人のつながりがあるからでしょうか？

そうですね。移住者同士だけじゃなく地元の人も一緒になって、今、駅前にカフェやこだわりのお店ができています。藤野の空気感が人を呼び、さらに新しい移住者を引き寄せているのかもしれないですね。シュタイナー教育では何か課題があると、みんなで納得するまで話し合うことを心がけます。時に合理的な解決策が出なくても「想いを寄せ合おう」と、前へ進むことも。実はそれが人のつながりやコミュニティにも必要なのかもしれません。

より自分の人生を生きる、
現在の移住者たち

――移住家庭の新築設計を多く手がけていらっしゃいますが、変化は感じますか？

池辺潤一さん
Junichi Ikebe

2007年に藤野へ移住。建築設計事務所『Studio ikb+』代表。自然素材を生かした家づくりを多く手掛ける。シュタイナー学園21期卒業生の保護者。

インタビュアー
柳田真樹子（事務局広報）

ライター
木村未来（事務局広報）

卒業生インタビュー

FUJINO STEINER COLUMN

19期卒業生 西田歩夢さん *Ayumu Nishida*

シュタイナー学園卒業後、国立音楽大学でチェロを学び、現在国立音楽大学非常勤講師としてチェロを教える傍ら、チェリストとして活躍されている西田歩夢さん。シュタイナー教育を通して音楽に出会ったという西田さんに、学園時代のことから現在までのお話をうかがいました。

ライター / 中村暁野

▼シュタイナー教育との出会いを教えてください。

母がシュタイナー教育に共感し、北海道にある「ひびきの村」のこども園に通ったのが最初の出会いです。ちょうど東京三鷹にあったシュタイナーシューレが藤野に移転し、学校法人シュタイナー学園になるタイミングで1年生から入学しました。

▼印象に残っている学びはありますか？

音楽の授業が大好きでした。歌もリコーダーを吹くのも好きでした。シュタイナー教育では、最初に音符を習ったりはしません。リコーダーを吹く時はまず手で笛をあたためてから。先生が吹く姿をよく見て、その通りまねをしておぼえていくのです。自分の音の響きだけではなく、まわりの人の響きにも耳を澄ませる。そんな授業でした。低学年の頃は、お米を作りおにぎりを全校の人に配った田んぼの授業や、木をぐるりと植えて家にする家づくりの授業もよくおぼえています。みんなで何かを作る授業は楽しかったです。

▼楽器をはじめたきっかけは？

低学年の頃に学園のオーケストラ演奏を聴いて興味を持ち、自分もその仲間になりたいと思うようになりました。母にチェロを弾きたいと言っても最初は本気だと受け止めてもらえなかったのですが、ちょうどガスパール・カサド国際チェロ・コンクールというコンクールが八王子で開催されて、街中でいろいろな弦楽器体験ができる機会があったのです。そこで弦楽器を一通り弾かせてもらい「やっぱりチェロがやりたい！」と。5年生からチェロを習いはじめ8年生の時に学園のオーケストラに入りました。

▼チェロのどんなところに魅かれたのですか？

音域が低く、音色が柔らかいところですかね。オーケストラに入るのも最初は少しためらっていたのです。僕がいたクラスは音楽好きな人が多く、チェロが3人、バイオリンは7人。みんなオーケストラに入っていました。はじめたばかりだという心配もあったのですが、やっぱり入りたい！と思い入ったのが8年生でした。

▼学園のオーケストラは練習が週に1回だと聞きました。

ほかの学校に比べるととても少ない練習量だと思うのですが、指導をしてくださる先生の力と、音楽の授業でも行われているような、まわりの音を聴く力、調和する力を大切に、無理をするのではなく、みんなでひとつのものを作り上げていくようなオーケストラでした。

▼念願のオーケストラに入り、クラスでも演奏されたそうですね。

中等部の集大成、8年生劇ではオーケストラを指導してくださっていた先生が音楽を作ってくださり、劇中音楽を演奏しました。その頃、進路について考え音楽大学附属高校の講座を受けたりもしました。音楽高校に行くか悩んだのですが、シュタイナー学園の高等部では農業実習や航海実習など、様々な実習があるのです。それを経験したいという思いがありました。音楽が大好きだけれど、シュタイナー学園の学びも好きだった。音楽の道に進む前にいろいろな世界に触れてみよう、とシュタイナー学園の高等部を選びました。

▼高等部ではどんなことを学ばれたのですか？

実習はとても楽しかったですし、オーケストラ以外にもバスケ部、バドミントン部、選択授業では茶道と、興味があることにたくさん向き合えた時間でした。音学大学に進学したいと思っていたので、高校1年生にあたる10年生の時から必要な学びを積み重ねていました。12年生の時は、卒業プロジェクトや12年生劇、卒業オイリュトミーと力を入れる課題に向き合いながら受験の準備も行っていましたが、すべて好きなことだったのでそんなに苦はありませんでした。そして国立音楽大学に進学しました。

▼大学卒業後、音楽の先生になろうと思っていたと聞きました。

音大卒業後、演奏家の道に進めるのは弦楽器では1/3から1/4くらいの人たちです。教師になろうと在学中に教職をとったのですが、4年生の時にちょうどコロナ禍になり、オンラインの授業とレッスンばかりになってしまったのです。それでも少し大学に残りオーケストラについて学びたいと思い、2年間オーケストラの授業とレッスンを受けられるアドヴァンスト・コースに進みました。その間に後輩のアンサンブルの授業に呼ばれるようになるなど、いろいろな場面で演奏をする機会に恵まれるようになりました。コースが終わった後は、チェロの授業補助をやらないかと声をかけていただき、大学に残り講師として教えるようになりました。今、コンサートを企画して演奏会をしたり、学生たちとカルテットを組んだり、音楽で生きていく道をはじめることができました。この先は、プロのオーケストラ楽団に入りたいという思いがあるので、そこに向かっていけたらと思っています。

▼最後にシュタイナー教育で得たと思うものを教えてください。

家族に音楽をやっていた人が誰もいなかった自分が音楽を好きになったのは、この教育を受けていたからだと思っています。音楽の授業や学園のオーケストラとの出会いがあったから、音楽を好きになれた。今の道に出会わせてくれたのが、シュタイナー教育だと思っています。

※2025年1月取材時の内容です。

過去の卒業生インタビューをご覧いただけます。
またニュースレターのご登録もこちらからどうぞ↓

コラム アーカイブ

ニュースレター 登録

今年も名倉校舎でオープンデイを開催します。今年のテーマは「響きあう世界へ」。教員と保護者、そして子どもたちの力も借りて、シュタイナー教育が大切にしていることやシュタイナー学園の魅力を感じていただけるよう準備を進めています。教室内では各学年の学びの流れがわかる作品やノートを展示し、教員がご案内します。また、子どもたちが受けている授業を体験する「大人のための体験授業」、小さなお子さまと楽しめる「人形劇」や、中等部生徒たちによるパフォーマンスも予定しています。おなかが空いたら保護者による手作りのお菓子や軽食コーナーへどうぞ。学園を巣立った卒業生たちもこの日はお手伝いに来て、皆さまと交流するひと時を持ちたいと思います。新緑の藤野へぜひ足をお運びください。

Information

4/25(金) 校内ツアー	7/19(土) 一学期祭・校内ツアー
5/24(土) オープンデイ	7/26(土) 夏のシュタイナー学校＆移住ツアー
5/31(土) 入学・転編入学説明会・中学生のための高等部体験授業	8/29(金) 疑問解消！お父さんのためのオンライン座談会
6/6 (金) 疑問解消！お父さんのためのオンライン座談会	9/6 (土) 入学・転編入学説明会・中学生のための高等部体験授業
6/21(土) 出張講座 シュタイナー教育体験講座(青山学院大学)	9/20(土) 出張講座 シュタイナー教育体験講座(青山学院大学)
6/28(土)・29 (日) 12年生卒業演劇	

※諸事情により変更する可能性がございます。詳細はシュタイナー学園のHPをご確認ください。

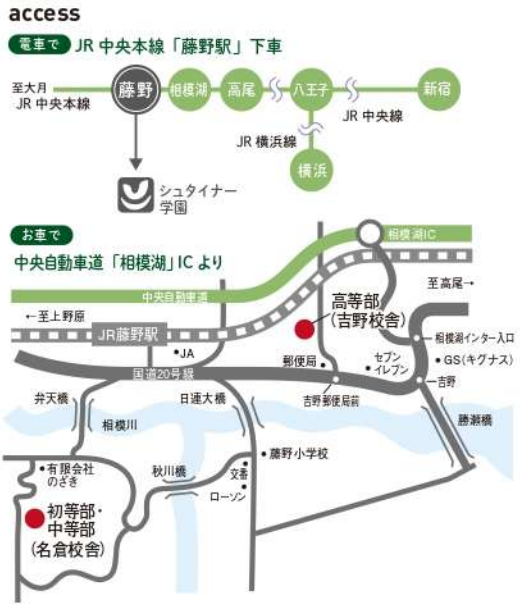
Fujino Waldorf School

シュタイナー学園　初等部・中等部
〒252-0187 神奈川県相模原市緑区名倉2805-1
TEL 042(686)6011 FAX 042(686)6030

シュタイナー学園　高等部
〒252-0183 神奈川県相模原市緑区吉野407
TEL 042(687)5510 FAX 042(687)5540

https://www.steiner.ed.jp/ シュタイナー学園 検索

@fujinosteinerjapan
@steiner_gakuen



シュタイナー学園通信

2025年3月 制作・発行 学校法人シュタイナー学園